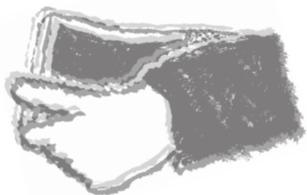


新書を小脇に挟んでみたら……

小島ゆかり ◎歌人
辻原登 ◎作家
長谷川櫂 ◎俳人

半歌仙

『小脇に新書の巻』



昨年十二月十六日に神奈川近代文学館で開かれた第十五回湘南連句座談会。三人の選者の「発句」「脇」と第三から第六句に続けて、参加者が楽しみながら句をつけて、半歌仙十八句を巻き上げた当日の様相をレポートする。

長谷川 今日はお集まりいただき、ありがとうございます。すでに表六句が巻き上がっているので、どのようにして詠んだのか、発句の小島ゆかりさんから、お話しいただきます。

小島 二〇一八年は、短歌の世界でもAI（人工知能）の話題が大変多い年でした。「発句を冬で」と題をいただいた時に考えたのは、AIにできないことは何だろうということでした。新書の内容を全部暗記できたとしても、それを小脇に挟むような人間的な姿は、まだできないだろうと思って、「セーターの小脇にはさむ新書かな」と詠みました。

辻原 学生時代、新書といえば僕は中公新書が好きでした。江上波夫の『騎馬民族国家』などの話題の新書を小脇に挟むと、何だかインテリジェンスが溢れて見えるという時代です（笑）。学生当時、日本は騎馬民族が打ち立てた国家だったという説に、知的刺激を受けました。

その騎馬民族はどこからやって来たのか。僕は北か

半歌仙『小脇に新書の巻』

〔初折の表〕

発句 セーターの小脇にはさむ新書かな

ゆかり(冬)

脇 冬の銀漢騎馬駆け下る

登(冬)

第三 火の島の火を噴く龍が迎へ撃つ

櫂(雑)

四 思ひ出はるか秋のワイキキ

ゆかり(秋)

五 シベリアに墓のある「月と不死」の作者

登(秋・月)

六 けさ寒々とひびく銃声

櫂(秋)

〔初折の裏〕

初句 バゲットの香りかかえて交差点

三智子(雑)

二 人間のふりしている宇宙人

登紀和(雑)

三 水着着て人目しので川泳ぎ

陽子(夏)

四 体育館裏五時二十分

優子(雑恋)

五 押し花のブックマークがひらり落つ

登紀和(雑)

六 昼の電車の優先席に

忠子(雑)

七 イヤホンを外して窓の外を見る

ゆづ子(雑)

八 海辺のまちに雪降り止まず

優夏(冬)

九 本年のセイウチ狩りの記録保持姉

しげる(雑)

十 春の光をはじくブラウス

三智子(春)

十一 花の下バカボンの父居眠りし

忠子(春花)

折端 頁閉じたる春の夕暮れ

清之(春)

世界春めくこれでいいのだ

ゆづ子(春)

ら銀河に乗ってきたのではないかと思ひ、「冬の銀漢騎馬駆け下る」と脇をつけました。

長谷川 古代の日本は、霧島や阿蘇、富士山など活火山も多く、火の島もありました。そこには龍もいて、押し入ってきた騎馬民族を迎え撃とうと待ち構えている——そんな姿を描き、第三は「火の島の火を噴く龍が迎へ撃つ」とつけました。

小島 第二句、第三句と漢字が多く使われ、騎馬が駆け巡ったり、龍が火を噴いたりする展開になりました。ここで風のようにスツと抜ける感じがほしくなり、四句目は「思ひ出はるか秋のワイキキ」と詠みました。

辻原 小島さんはハワイで楽しい思いをしていらつしやる。でも、そんな思いをいつまでもさせてはならない！と思ひました（笑）。五句目は極寒の地へ飛び「シベリアに墓のある「月と不死」の作者」とつけました。

『月と不死』の著者、ニコライ・ネフスキーは一九一四年に来日し、大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）の初代ロシア語の教師を務めました。彼は西夏文字（古代中国文字）の研究者でもあり、民俗学者として柳田国男や折口信夫らと交流し、日本の民俗学調査も